

Thomas Sutpen の亡霊 : *Absalom, Absalom!*に おける history と historiography

森本 奈理

I. はじめに

よく知られているように、William Faulkner の最高傑作 *Absalom, Absalom!* (1936) は、Miss Rosa Coldfield, Mr Compson, Quentin Compson, Shreve McCannon という4人の語り手が、Henry Sutpen による Charles Bon 殺害の原因（「Sutpen の design」）を推理する、一種の探偵小説であるが、その過程で彼らはアメリカ南部の歴史全体を概観することになる。Rosa を除いた3人は Thomas Sutpen を直接目撃したことがなく、この「不在」を埋め合わせる「語り」こそが物語の大きな特徴になっており、Sutpen を「中心」に据えることで物語は展開していく。しかしながら、現在の *Absalom, Absalom!* 批評においても、Sutpen という「中心」より、Miss Rosa や Haiti といった「周縁」のほうにはるかに大きな焦点があり、Sutpen の「不在」はまさに「不在」そのもの、といった状況を呈している。もちろん、私とて、アメリカ（白人男性）帝国主義の「暴虐」を可視化する現代文学批評の有用性を認めるのに吝かではないが、ここでは今一度、Sutpen という *Absalom, Absalom!* の起源に立ち返ってみたいと思う。「Sutpen は何者か」という謎についても未だ明確な解答は出ていないし、また、「中心」について考察することは「周縁」をよりよく理解するためにも役に立つだろうからだ。そうするにあたって、「沼地のなかの Sutpen」「ブドウ棚の下の Sutpen」という、2つの「タブロー」を手がかりに議論を進めていきたいと思う。

II. 第一のタブロー：「沼地のなかの Sutpen」

Absalom, Absalom! の4人の語り手は、Sutpen をめぐるいくつかの心象風景をもとに物語を紡いでいくが、こうした「タブロー」のなかで最も有名なものが、「黒

人奴隷を引き連れて Jefferson に突如現れる Sutpen」像であろう：

Out of quiet thunderclap he would abrupt (man-horse-demon) upon a scene peaceful and decorous as a schoolprize water color [...]. Immobile, bearded and hand palm-lifted the horseman sat; behind him the wild blacks and the captive architect huddled quietly, carrying in bloodless paradox the shovels and picks and axes of peaceful conquest. (6)

Sutpen を「野蛮な黒人奴隷を従えた白い肌の悪魔」だと定義する、このタブローを最初に提示するのが Miss Rosa であるが、この点に関して、他の語り手たちの間にも異論はない。近年流行の「帝国主義」批評が注目するのもこのタブロー（のみ）で、ここから引き出される結論は、Sutpen という悪鬼によって人間としての尊厳を踏みじられた Miss Rosa の怒り、ということになる。相続人となる男児を産むことができれば、晴れて正式に婚姻関係に入ろうと提案する Sutpen に対して、Miss Rosa は憤然と「ノー」をつきつけるのであり、これにより、「オールド・ミス」とならざるをえなかった南北戦争後の南部淑女の怒りが、このタブローには投影されているのである。¹

しかし、注意しなければいけないのは、Sutpen に対する Miss Rosa の感情が「オールド・ミス」の怒り一辺倒だったわけではないことである。Miss Rosa はその体内に何の欲望も持ち合わせぬ、完全に干乾び果てた老女だったわけではなく、やはり、「ロマンス」に対する憧れを持ち続けているのだ。若かりし頃には、Charles Bon, Judith Sutpen の「ロマンス」に触発され、Judith のためにウェディングドレスを縫い上げているし、40ほど年の離れた老人の Sutpen に結婚を申し込まれたときには、心をときめかせているのだ。要するに、Miss Rosa にとって、Sutpen は、自らの野望を実現するためにはどんな犠牲も厭わない「悪魔」だっただけでなく、いかなる犠牲を払ってでも欲望を現実化しようとする「英雄」でもあった、ということである。

この、ヒーローとしての Sutpen 像を Miss Rosa が投影させているのが、「沼地のなかの Sutpen」というタブローである。Sutpen は、文字通り、裸一貫で、miasma 立ちこめる「沼地 (swamp)」から10マイル四方のプランテーションを築きあげた self-made man であるが、彼が poor white から planter へと upward mobility を完成させる過程で、Ellen, Rosa Coldfield 姉妹の占める位置は、あたかも、健康的な日の光に満ちた、乾いた大地のようであったとのことである（その意味で姉妹の family name に field という単語が含まれているのは示唆的である）：

[...] *my presence was to him only the absence of black morass and snarled vine and creeper to that man who had struggled through a swamp with nothing to guide or drive him—no hope, no light: only some incorrigibility of undefeat—and blundered at last and without warning onto dry solid ground and sun and air—if there could have been such thing as sun to him, if anyone or any thing could have competed with the white glare of his madness.* (137)

この描写では、白く輝く「後光 (aura)」を身にまといながら、陰鬱な「沼地」の暗闇を無我夢中で分け進む Sutpen 像が呈示されているが、この、神にも似た Sutpen のあとを追うことから、議論を始めていきたいのである。

ここで、我々が Sutpen に重ね合わせるべきイメージは、植民から独立に至るまでの「アメリカ」建国のプロセスである。「階級」という伝統が存在する旧大陸ヨーロッパから見て、建国当初の「アメリカ」は、「階級」無き民主主義国家の実現という途方もない理想を掲げているがために、集合体としての成功の見込みが薄い（文明的）後進地帯であり、新大陸アメリカにおいて、人類は退化するとの言説が流行した。こうした際に、ヨーロッパ人は、アメリカを *miasma* 立ちこめる「沼地」のメタファーでもって語ったのだが、この「アメリカ退化論」に対抗する目的で書かれたのが、Alexander Hamilton らによる *The Federalist Papers* (1787-88) なのである。

まずは、瘴気たちこめる湿地アメリカでは、人類は進化するのではなく、退化するのだという「退化論」から見ていくことにしよう。この「アメリカ退化論」を最も簡潔に示している文学作品が Edgar Allan Poe の "The Fall of the House of Usher" (1839) である。あまりにも有名な Usher 家の屋敷は、*miasma* 立ちこめる「沼地」の上に建っている：

[...] *about the whole mansion and domain there hung an atmosphere peculiar to themselves and their immediate vicinity—an atmosphere which had no affinity with the air of heaven, but which had reeked up from the decayed trees, and the gray wall, and the silent tarn—a pestilent and mystic vapor, dull, sluggish, faintly discernible, and leaden-hued.* (201)

Roderick, Madeline Usher 兄妹は、一家最後の生き残りだが、心身ともに病んでいる。この病の原因は、湿地帯に館が建っているという地理的なものではなく、体

質・遺伝的なものであるという：“It [Roderick’s malady] was, he said, a constitutional and a family evil [...]” (203)。瘴気立ちこめる「沼地」や建物の配置がその住民に影響を与えてもいるようなので、病の原因は環境的なものかと思いきや、 “[...] the stem of the Usher race, all time-honored as it was, had put forth, at no period, any enduring branch; in other words, that the entire family lay in the direct line of descent, and had always, with very trifling and very temporary variation, so lain” とあるように、Usher 家の人々にとって、この地以外への転居は選択肢ですらなく、やはり、ここでは、「環境」は全く問題になっていないのである (200)。「環境」決定論と「遺伝」決定論は二律背反の関係であるが、「環境」面での他の選択肢が用意されていない以上、「環境」決定論を問題にすることはできない、ということである。

この館の主 Roderick Usher は、Thomas Sutpen の全く対極をなす人物であり、徹底した運命論者である。我々は、Roderick の内面に、「理性」や「自由意志」といったアメリカ的精神を一寸たりとも見ることはないが、彼が取り憑かれている「運命」とは、繁殖（生殖）能力を喪失した Usher 家の家系が彼のところで完全に途絶えてしまう、という「退化」の悪夢である。すなわち、Roderick の姿を借りて Poe が描き出しているのは、「自由意志」を持たず、「退化」という「運命」になす術もなく翻弄される、反アメリカ的な人物なのである。

そして、改めて言うまでもないことだが、*Absalom, Absalom!* は、この “The Fall of the House of Usher” を下敷きにした物語である。両者の類似点をいちいち挙げていくのは退屈な作業なので、ここではやらないが、最も重要なのは結末の類似性である。Usher 屋敷が Roderick, Madeline 兄妹（の死体）もろとも「沼地」に没するのと同じように、Sutpen 屋敷も Clytie, Henry の姉弟もろとも焼失してしまう。（ここで、Faulkner は先行テキストを「脱構築」していない、と言っておいてもよいだろう。）しかし、これは結論であり、私が問題にしたいのはそのプロセスなので、Thomas Sutpen のあとを追うことに戻ろう。

「沼地のなかの Sutpen」というタブローにおいて、Sutpen の立ち位置は、Roderick Usher のそれではなく、Alexander Hamilton のような「建国の父たち（founding fathers）」のそれである。ヨーロッパが押しつけようとする決定論をものともせず、人間の「自由意志」の力を信じて、miasma 立ちこめる「沼地」を突き進む。Sutpen は、まさにアメリカ流の「個人主義」を体現した人物であり、自らの「理性」だけを頼りに、無一文から Jefferson で一番の planter にまで成りあがった英雄である。

成り上がることを決意した1821年から、ついに息絶えてしまう1869年まで、己の力だけを頼りに、「太陽」を手に入れようと奮闘する Sutpen は、彼とほぼ同時代を生きた（と推察できる）*Moby-Dick* (1851) の Captain Ahab とオーバーラップする。² もちろん、Sutpen は Ahab よりもはるかに「物質主義」的で俗世間の垢にまみれた人物なのであるが、神に挑みかかることも辞さない強烈な自我を持っているという点で、両者の間に大きな差異はないように私は思う。*Absalom, Absalom!* の語り手たちはみな、Sutpen を「悪魔」だと誹っているが、この呼称は、神にも挑みかかる Sutpen の強大な「自由意志」を反映していると解釈すべきである。

このアナロジーは一考に値する。「自由意志」、あるいは「権力への意志 (will to power)」は、1930年代に世界史の舞台を席卷したファシズムの指導者に典型的に見出されるものであり、彼らは、「オーラ (aura)」としか呼びようのないものを利用して、部下や一般人民の心を支配した。³ ここで私が言いたいのは、Sutpen も Ahab も、こうした「オーラ」を持っていたのであり、それゆえに、前者にあつては黒人奴隷、後者にあつては乗組員、の心を完全に掌握できたのである。おそらくは、この「オーラ」ゆえに、Sutpen, Ahab は、「人間」と「神」の間に存在する差異を超越し、全知全能の神のごとく、持ち駒を思いのままに動かすことができたのであろう。

それでは、この「オーラ」とは、一体どのようなものなのだろうか。率直に言えば、「オーラ」とは説明不可能な要素であり、このような「謎」が存在するからこそ人間は尊いのだ、と私は強く信じているが、ここでは、論理的思考を表明しなければならないので、「オーラ」にもメスを入れることにする。おそらく、Sutpen, Ahab の「オーラ」は、1848年から第一次大戦ごろまでのアメリカで流行した「催眠術 (mesmerism)」と深い関係があったのではないだろうか。この mesmerism を簡単に定義しておく、問題になるのは「見る」「見られる」の特殊な関係であり、強力な眼力を持った施術者の視線にさらされると、感受性の強い人間は催眠状態に陥り、施術者の言いなりになってしまうのである。⁴ (感受性の強い人間とは、女性や黒人といった、当時の「社会的弱者」を多く意味していたようである。) また、mesmerism の別名は animal magnetism であり、この名称が示すように、何らかの「電気力」とも結びつけて考えられていた。

まずは Ahab の眼力から見ていくことにするが、彼の部下 Stubb はそれを以下のように形容する："How he flashed at me!—his eyes like powder-pans!" (159)。Stubb は、Ahab の義足がたてるひどい騒音を揶揄するのだが、そのために Ahab

からののしられてしまう。鼻っ柱の強い Stubb は、侮辱をそのままやり過ごさず、Ahab にくってかかるが、Ahab のあまりの眼力に刃向うことができなくなってしまふ。Stubb がその眼力を銃火器の「火皿」のようだと形容しているのは面白い。まさにライフル銃のように相手を殺傷する性能を持っているからこそ、四の五の言わさずに、服従させることができるのである。

そして、Ahab がこの眼力を最大限に活用するのが、後甲板に乗組員全員を呼び集め、打倒「白鯨 (Moby Dick)」の決起集会をするくだりである：

"Advance, ye mates! Cross your lances full before me. Well done! Let me touch the axis." So saying, with extended arm, he grasped the three level, radiating lances at their crossed centre; while so doing, suddenly and nervously twitched them; meanwhile, glancing intently from Starbuck to Stubb; from Stubb to Flask. *It seemed as though, by some nameless, interior volition, he would fain have shocked into them the same fiery emotion accumulated within the Leyden jar of his own magnetic life.* The three mates quailed before his strong, sustained, and mystic aspect. Stubb and Flask looked sideways from him; the honest eye of Starbuck fell downright. (199 emphasis added)

まさにこの場面では、Ahab の体内に蓄積された「意志力」が眼で「電気力」に変換され、その視線の先にある3人の上級船員を催眠術にかけようとしているのである。⁵

催眠術師 Ahab が残りの乗組員に催眠術をかけるやり方はなかなか巧妙である。上記の上級船員の場合と異なり、Ahab は個別に眼力で催眠術をかけようとはせず、自らの眼の代わりになるものを用意し、それに乗組員たちを監視させようとするのだ。この「魔力を持った眼」に代わるものこそが、メインマストに打ちつけられた「ダブルーン金貨」であり、Ahab は、最初に「白鯨」を発見したものに褒美としてそれを取らせようというのである：

Receiving the top-maul from Starbuck, he advanced towards the main-mast with the hammer uplifted in one hand, exhibiting the gold with the other, and with a high raised voice exclaiming: "Whosoever of ye raises me a white-headed whale with a wrinkled brow and a crooked jaw; whosoever of ye raises me that white-headed whale, with three holes punctured in his starboard fluke—look ye, whosoever of ye

raises me that same white whale, he shall have this gold ounce, my boys!" (195)

乗組員の「欲望の対象」である「金貨」を手にするためには、「白鯨」を最初に見つけた者として「Ahab の認知」を受けねばならず、メインマストの「金貨」を目にするたびに、そこには「Ahab の視線」が内在されていることに、彼らは気づくのだ。

このように、金貨1枚で乗組員全員を手なずけてしまう Ahab のやり口は、Sutpen の plantation の起源と不思議なほど似ている。最初に Jefferson にやってきた際、Sutpen は最後の金貨1枚で、ネイティブ・アメリカン（インディアン）から肥沃な土地を奪取することに成功する：

It was the Chickasaw Indian agent with or through whom he [Sutpen] dealt and so it was not until he waked the County Recorder that Saturday night with the deed, patent, to the land and the gold Spanish coin, that the town learned that he now owned a hundred square miles of some of the best virgin bottom land in the country [...]. (27)

おそらく、Sutpen は、催眠術の力を借りることで、金貨1枚では釣り合わない広大な土地をインディアンからせしめたのだろうが、彼がこの力を最大限に活かしていたと考えられるのが、plantation 建設のくだけりである。Sutpen は土地の権利を手にした後、20人の黒人奴隷と1人のフランス人建築家を連れて、湿地を plantation に改造しようとするが、彼は部下が逃げ出してしまうリスクを全く考慮していない。すなわち、黒人奴隷もフランス人建築家も野放し状態なのだが、どういうわけか黒人奴隷が逃亡を企てることはない。（このことの奇妙さは、フランス人建築家が逃亡をはかることで浮き彫りになる。）人里離れた未開地で、何の奴隷拘束器具の助けも借りずに、1人の人間が20人の黒人奴隷を支配するのは不可能であり、Sutpen がこのような超人的な偉業をいとも容易くやってのけるのは、やはり、彼には Ahab と同じような「魔力を持った眼」が備わっていた、と想定せざるをえないのである。⁶

この項目の締めくくりに、Sutpen と Miss Rosa の関係に戻っておこう。先述したように、「沼地のなかの Sutpen」は、Miss Rosa のロマンス志向性が生み出したタブローであるが、彼女のなかにこのロマンスを生み出したのが他ならぬ Sutpen の催眠術ではないだろうか。2人が「ロマンス」に陥るのは以下のようにしてである：
"[...] *looking at me with something curious and strange in his face [...]*" (135)。Sutpen が初めて Miss Rosa を見つめた際に、全ての手筈は整ったのであり、

彼女はこの晩に Sutpen からの求婚を受け入れる。Miss Rosa が名状できない、Sutpen の顔に浮かんだ何かとは、まさしく「魔力を持った眼」であり、このときから Miss Rosa は催眠術にかかっているのだ。⁷ Miss Rosa は、*Absalom, Absalom!* 第5章の独白で、自分を"*self-mesmered fool*"と定義づけるが、この用語法にはそう考えるに足るだけの含みがある(114, 116)。彼女はこの独白の終わりで、いかなる女性も Sutpen の心を所有することはできない、と言つてのけるが、ここに恋する乙女の矜持を感じるのは私だけなのだろうか：*"I mean that he was not owned by anyone or anything in this world, had never been, would never be, not even by Ellen, not even by Jones' granddaughter. Because he was not articulated in this world. He was a walking shadow"* (142)。ある意味で、Miss Rosa は、まだ恋の病から冷めてはいないのである。

III. 第二のタブロー：「ブドウ棚の下の Sutpen」

第二のタブロー「ブドウ棚の下の Sutpen」は、Quentin, Shreve が南北戦争後 plantation に帰って来た Sutpen を記述したものである。南北戦争のために、奴隷はいなくなり、かつて栄華を誇った plantation も荒廃してしまったのだが、Sutpen は唯一の部下である Wash Jones とともに、ブドウ棚の下で、在りし日の栄光に想いを馳せながら、くだを巻いているのである：

[...] (and Jones even sitting now who in the old days, the old dead Sunday afternoons of monotonous peace which they spent beneath the scuppernong arbor in the back yard, the demon lying in the hammock while Jones squatted against a post, rising from time to time to pour for the demon from the demijohn and the bucket of spring water which he had fetched from the spring more than a mile away then squatting again, chortling and chuckling and saying 'Sho, Mister Tawm' each time the demon paused) [...] (152)

planter の Sutpen がハンモックに寝そべり、poor white の Jones が彼のそばに控えているという構図は、彼が少年時代に Tidewater (Virginia の沿岸地域) で目撃した planter のイメージを焼きまわしたものだが、もちろん、Sutpen のものは、南北戦争の結果を受けて、はるかに色あせたものになっている。(ところで、これらの

構図には、Faulkner の歴史認識がよく反映されていて面白い。南北戦争前の Virginia の planter にかしずいているのは黒人奴隷の執事であるが、南北戦争後の Sutpen にかしずいているのは poor white である。戦争前には白人貴族層と黒人奴隷の間にむしろ親しみがあつたのに対して、戦争後は、(解放) 黒人の権利拡大を防ぐために、白人貴族層が poor white と連帯した事実をここに読み取ることができる。) ここで注目すべきなのは、アメリカ南部において、「ブドウ (scuppernong)」が「古き良き南部」を体現するシンボルに他ならなかった、という点である。このことを確認するために、「ブドウ畑」がストーリーの大きな要素となっている、Faulkner の短編 "Black Music" (1934)、奴隷解放後の南部に反感を抱いていたアフリカ系アメリカ人 (黒人) 作家 Charles Chesnutt の短編連作集 *The Conjure Woman* (1899) をひも解いてみたい。

まずは、"Black Music" であるが、物語の外枠では、Rincon という (おそらくは Puerto Rico の西部に位置する) 都市で、語り手が、Wilfred Midgleston というアメリカ本土からの流れ者に食事を御馳走しながら、Midgleston が本土から逃げ出すに至った経緯について尋ねている。物語の内枠となる Midgleston の告白は、にわかには信じがたい話で、南部伝統の「ほら話 (tall tale)」の一種であると考えられる。北部の大金持ちが Virginia のブドウ畑を買い取り、ブドウを引っこ抜いて、テーマパークを建設しようとするのだが、その土地には「魔法」がかかっており、Midgleston が仕事でそこを訪れた際に、「土地の守り神 (faun)」に変身させられてしまい、大金持ちの妻を脅かした挙げ句、夫妻をそこから追い払ってしまった、ということである。(内枠の出来事がいつ起こったのかは明らかにされていないが、外枠の25年前の出来事とされており、外枠の時間を短編が発表された1934年とすると、内枠の時間は1909年となる。そうすると、この出来事は、Quentin, Shreve が Harvard の宿舎で語っているのと同世代のことになる。また、この時間は、Chesnutt の小説のそれから10年しか離れていない。)

土地の人々によると、問題のブドウ畑は、「肥沃な土地だが、だれも住もうとは思わない」とのことであり、それは、そこでこれまでに2例ほど不幸な出来事が起きているからである、というのだ。最初は、a New England fellow と呼ばれる男で、金儲けのためにブドウを収穫しようとしているときに、ヤギに襲われ足を骨折してしまい、故郷に逃げ帰ってしまったのである。その次は、a I-talian と呼ばれる男で、当初はブドウからワインを作って大儲けしていたのだが、ある日、ブドウの収穫中に嵐に遭ってしまい、自家用トラックの下敷きになって、死んでしまったのだ

という。こうしたことがあって、誰もその土地を恐れて近づこうとしない間に、Mr. Van Dyming という北部の資本家はその土地を安く買い叩き、妻が思いのままに土地を改造させるにまかせたのである："Anyway, none of them would live on it, and so Mr. Van Dyming bought it cheap. For Mrs. Van Dyming. To play with" (807)。三度目の悲劇は、立派な邸宅を建てた Mrs. Van Dyming が、劇場を作ろうと、ブドウ畑を取り壊し始めた瞬間に訪れる。牧神に変身した Midgleston は、ブドウ畑で Mrs. Van Dyming を追いかけてまわすのだが、彼の吹き鳴らす笛をナイフと見間違えた Mrs. Van Dyming は、てっきり気のふれた殺人鬼に追いかけてまわされていると思いこみ、恐怖のあまり早々に New York に帰ってってしまう。こうして、彼女の「計画 (design)」はおじゃんになってしまうのである。

ここで重要なのは、明らかに Faulkner が「北部」「南部」の対立を意識しながら、物語を生みだしていることである。すなわち、土地を所有するのはいつも決まって「北部人」である一方で、買われる土地は、かつての南部 plantation の痕跡をとどめているのである。南北戦争の敗戦後、南部に「北部資本主義」が侵入してくるようになり、「古き良き南部」が急激に解体されていった、というのは Faulkner 文学の一大テーマであるが、やはり、このテーマを"Black Music"にも読み取るべきなのだ。Faulkner の政治的スタンスは「穏健中道」であり、「アメリカ (北部)」的な liberalism と「旧南部」的な paternalism という相対立するイデオロギーを両方持っているのだが、それでも基本軸は後者 paternalism のほうにあり、"Black Music"では、北部 liberalism を愉快的形でやりこめているのである。

さらに興味深いことには、Faulkner の"Black Music"とほぼ同じ趣旨の先行作品が存在する、ということである。もともとは北部の弁護士であったアフリカ系アメリカ人の Charles Chesnutt は、自らのルーツである「南部」の人種状況について書こうと作家活動に打って出て、*The Conjure Woman* という連作短編集を処女作として出版した。Chesnutt は、南北戦争前の人種状況を理想としており、白人貴族層と黒人上層の間の連帯を可能にする paternalism をとりわけ信望していたのだが、処女作では、当時の読者におもねる形で、力の弱い黒人が力の強い白人を知恵比べでやりこめる「ほら話」を書くことになった。したがって、皮肉なことに、Chesnutt 自身はあまりこの短編集を好んでいなかったのだが、彼の書いたものの中ではこれが一番よく売れたこともあり、Chesnutt の名前は、黒人の口承伝統である「ほら話」の名手として主に知られることになってしまう。

The Conjure Woman は連作短編集であり、Joel Chandler Harris の Uncle

Remus をほうふつとさせる黒人の Julius McAdoo が、北部からの移住者である語り手に対して、数々の「ほら話」を語っている。ここでは、その中の1つ "The Goophered Grapevine" を取りあげることにする。この短編は短編集の最初に置かれており、そこでは、Julius による「ほら話」だけでなく、南北戦争後の南部の状況についても言及されている。語り手は、五大湖からの冷気が妻の健康を害していることを危惧して、気候のよい Patesville, North Carolina (Patesville は架空の名称) に引っ越してくる。語り手は、そこに北部との「気質」の違いを感じ取り、自分たち夫婦も南部的「気質」に染まりつつあると告白する : "we had already caught some of the native infection of restfulness [...]" (7)。その一方で、語り手は、北部でもブドウ栽培にたずさわっていたこともあり、ここ Patesville でもブドウ栽培に適した場所を探しまわりますが、その過程で、かつてここでもブドウ栽培は行われていたが、南北戦争のために過去の遺物になってしまった、と述べている :

I found that grape-culture, while it had never been carried on to any great extent, was not entirely unknown in the neighborhood. Several planters thereabouts had attempted it on a commercial scale, in former years, with greater or less success; but like most Southern industries, it had felt the blight of war and had fallen into desuetude. (6)

そうこうするうちに、そうしたブドウ畑の1つとして McAdoo 家の plantation の存在を聞きつけた語り手は、そこがブドウ栽培にうってつけだと判断し、現地調査に出かける。そこで、語り手は、大量のブドウを食べている Julius に遭遇し、買い取るつもりブドウ畑について、それとなく探りを入れるが、Julius は、語り手が(北部からやって来た)事情を話す前に、「あんたは、このブドウ畑を買い取りにやって来た北部人かな?」と言い返してくる : "Is you de Norv' n gemman w' at' s gwine ter buy de ole vimya' d?" (8)。

このやりとりから判断すると、どうやら、語り手の他にも、ブドウ畑を買い取ろうとしてやって来た北部人はたくさんいたようであり、これまでのところ、Julius はその全員を追い返すことに成功してきたらしい。やや勿体ぶった調子で、Julius は、語り手に、「ここを買い取ることは勧められないわな」と言い放つ : "[...] but 'f I' uz in yo' place, I wouldn' buy dis vimya' d" (8)。そして、その理由を尋ねる語り手に対して、Julius は、「実際のところ、このブドウ畑には魔法がかけられているんだわさ」と説明する : "[...] but de truf er de matter is dat dis yer

ole vimya' d is goophered" (9)。この続きを聞いたがる語り手に応えて、Julius は、いかにしてブドウ畑が魔法をかけられ、呪われてしまったのかを語り出す。

かつて、McAdoo 家が所有していた、このブドウ畑は、すばらしいブドウがたくさん実ることで知られていた。近隣にブドウ畑はこれしかなく、plantation ではたくさん黒人奴隷が使役されていたが、ブドウは彼らの大好物であり、監視の目を盗んでは、勝手に取って食べてしまうのだった。主人 Dugal' McAdoo は、ブドウからワインを作って利益を得ていたので、盗み食いを防ぐために、近隣で最も強力な魔法を使う老婆 Aun' Peggy に相談することにした。Aun' Peggy は、ブドウ畑に魔法をかけ、「このブドウを取って食ったやつは1年以内に死ぬぞ」と言い放つが、黒人たちは voodoo を使うこの老婆を非常に恐れていたもので、以後、盗み食いは全くなかった。ただし、Aun' Peggy の魔法の効力を示すために、3つの不幸な事例について触れることを Julius は忘れない：

[. . .] a strange gemman stop at de plantation one night ter see Mars Dugal' on some business; en his coachman, seein' de scuppernon's growin' so nice en sweet, slip 'roun' behine de smoke-house, en et all de scuppernon's he could hole. Nobody did n' notice it at de time, but dat night, on de way home, de gemman's hoss runned away en kill' de coachman. W' en we hearn de noos, Aun' Lucy, de cook, she up 'n say she seed de strange nigger eat' n' er de scuppernon's behine de smoke-house; en den we knowed de goopher had b' en er wukkin'. Den one er de nigger chilluns runned away fum de quarters one day, en got in de scuppernon's, en died de nex' week. W' ite folks say he die' er de fevuh, but de niggers knowed it wuz de goopher. (11)

まずは最初の2例だが、他所者の黒人御者が、魔法のかかったブドウを盗み食した挙句、馬に蹴り殺されてか馬車の下敷きになってか死んでしまい、さらには、ブドウ畑に逃げ込んだ黒人少年が1週間で死んでしまった、という。

そして、この次にくる最後の事例が、Julius 得意の「ほら話」である。(Faulkner の"Black Music"においても、3例目が「ほら話」であった。) plantation の人手が足りなくなったので、Dugal' McAdoo は新たに奴隷 Henry を買い入れるが、手違いから、彼にはブドウに魔法がかかっていることが伝えられず、Henry はブドウを盗み食いしてしまう。食べたブドウには魔法をかけられていることを知った Henry は、なんとか助けてもらえないかと Aun' Peggy に懇願する。Aun' Peggy は、春

になり、ブドウが成長し始めたら、その蔓を切って、そこから出る汁を頭に塗りつけるように、Henry に言う。そうすれば、その年の間中、魔法にやられることはない、というのである。Henry は、早速これを実行に移すが、それと同時に不思議なことが起こるようになった。Henry は、健康だが年老いており、頭は禿げあがっていたのだが、ブドウの成長と合わせるように、どんどんと髪が生えていき、夏には誰よりも豊かな髪量をほこるようになる。しかし、秋になり、ブドウがしおれ落葉し始めると、Henry の髪の毛はどんどんと抜けていき、最後には完全に禿げあがってしまったのである。そして、Henry の髪だけでなく、身体にも全く同じことが起こる。夏には誰よりも元気になる一方で、冬にはリューマチで体が動かなくなり、全くの死人のようになってしまうのである。⁸ 主人の Dugal' McAdoo は強欲なので、Henry の不思議な現象を利用して、金儲けをたくらむ。すなわち、夏の元気なときに高値 (1500ドル) で Henry を売り飛ばし、冬の瀕死の時期に安値 (500ドル) で Henry を買い戻すのである。

この主人の強欲が、Henry の息の根を止めてしまうことになる。ブドウ畑の収穫を増やそうと、Dugal' McAdoo は、北部からの「農業コンサルタント」に、畑の手入れをさせる。この「農業コンサルタント」は完全な香具師で、その年のうちにブドウは完全に枯れて駄目になってしまい、それと同時に、Henry も死んでしまう。ブドウ畑は数年で元に戻ったが、Dugal' McAdoo は、なんとか北部人に恨みを晴らそうと、勢い込んで南北戦争に出かけるが、そこで戦死してしまい、plantation も荒廃してしまった、と Julius は語る。そして、Julius は、語り手に、再び、「このブドウ畑は買わないほうがよい」とアドバイスする。魔法のかかったブドウは枯れたとはいえ、なかには生き残った株もあり、Julius のように、魔法のかかったブドウとそうでないブドウを見分けられるものでないと、悲劇は繰り返されるかもしれない、というのがその理由である。

結局、語り手は、Julius の「ほら話」に取り合わず、ブドウ畑を買い取り、金銭的に成功を収めるので、"The Goophered Grapevine"において、北部の資本主義精神から「古き良き南部」を守ろう、という Julius の目論見は頓挫するのだが、彼の「ほら話」は、いつも、「感受性の強い」語り手の妻を怖がらせるのであり、このあとの短編では、語り手が彼の妻に説得されて、Julius の目論見通りに事が運ぶことになる。(そもそも、"The Goophered Grapevine"でも、Julius の目論見通りに事が運び、語り手がブドウ畑の購入をあきらめて北部に帰ってしまえば、*The Conjure Woman* という連作短編集は成立しないことになってしまう。) また、Julius が語る

物語は、「ほら話」ではあるのだが、そこには、利益第一主義の planter の姿が描かれていることにも注意を払っておきたい。Henry を売買して利益を挙げる、という笑い話は、Virginia のような「低南部」から、Mississippi のような「深南部」へというアメリカ国内での奴隷売買、「第二の中間航路」をパロディーしてもいる、ということである。

「ブドウ棚の下の Sutpen」というタブローに戻ろう。このタブローにおいても、古き良き時代の plantation を反復する Sutpen は、北部に対して反感を表明していることを忘れていけない。酔いにまかせて、Sutpen は、今から Washington DC に乗り込んで、Abraham Lincoln, William Sherman の首をとってやる、と息巻くのである：“[...] he would rise, swaying and plunging and shouting for his horse and pistols to ride single-handed into Washington and shoot Lincoln (a year or so too late here) and Sherman both, shouting, ‘Kill them! Shoot them down like the dogs they are!’ [...]” (152-53)。そういう意味では、「ブドウ棚の下の Sutpen」が、極めて「アメリカ北部資本主義」のロジックである liberalism への反抗を示しているのは自明なのであるが、ここでの強調点は、「ブドウ (scuppernong)」という記号が、旧南部の plantation とどれだけ深く結びついているかを明らかにすることのほうにあったことを忘れないでいただきたい。

IV. 「初めに奴隷制ありき」

ここまで、小説の中心軸をなす Sutpen をなるたけ生け捕りにせんとの思いから、「沼地のなかの Sutpen」「ブドウ棚の下の Sutpen」という2つのタブローを分析してきたが、ここに来て、この2つのタブローが相矛盾していることに我々は気づかされる。「沼地のなかの Sutpen」が、徹底した個人主義者、liberal の Sutpen を描いたタブローであるのに対し、「ブドウ棚の下の Sutpen」は、北部資本主義のエートスたる liberalism に反抗する、paternalist としての Sutpen を描いたタブローであることに注意する必要がある。

ここから引き出される1つの結論が、liberalism, paternalism は、一見対立するようであるが、Sutpen のような1人の人間のなかに共存している以上、本質的には同じものなのだ、とするものである。この結論が現在流行のそれなのであるが、要するに、paternalism を脱構築してしまう、マルクス主義的な戦略なのである。そし

て、私はこの解釈を採るつもりは断じてない。というのは、*Absalom, Absalom!* という小説に関する限り、Faulkner の意図は paternalism を脱構築することにあつたのではない、と堅く信じているからだ。paternalism を脱構築して、そこに liberalism と変わらない要素を見出してしまうと、たとえば、Sutpen と Flem Snopes の違いがぼやけてしまう。確かに、両者に本質的な違いはない、と言ってしまふのも一理あるのだが、私としては、Sutpen, Flem の間には乗り越えがたい差異があるのであり、この差異の源泉が、Sutpen にはあるが Flem にはない、「貴族主義」的な要素である、と考えたいのである。要するに、Faulkner も言うように、Flem はただの守銭奴だが、Sutpen は英雄的人物であり、前者が liberalism を完璧に体現しているのに対して、後者にはそれだけでは説明のつかない「何か」があるのだ。⁹

もちろん、Sutpen という1個の人物に、liberalism, paternalism という矛盾する要素が共存していることに居心地の悪さを感じるのは正しい。というのは、liberalism は「(アメリカ) 民主主義」のロジックであり、「人種 (race)」「ジェンダー (gender)」「階級 (class)」のそれぞれにおいて、「支配するもの」「支配されるもの」の「差異」を解消する方向性を持つのに対して、paternalism は、こうした「差異」を本質的なものと捉え、むしろ、「差異」を維持するのに一役をかうものであるからだ。言い換えると、liberalism において、「差異」は文化的なものであり、ある個人がどのような「環境」で生まれ育ったかによって決定されるのである一方、paternalism においては、「差異」は先天的なもので、「遺伝」によって予め決定されており、後天的に変更が加えることができるものではないのだ。しかし、信じ難いことかもしれないが、こうした真逆の「ベクトル」を脱構築してではなく、そのままの形で一身に体現してしまったのが Sutpen なのであり、ここにこそ彼の「英雄性」「悲劇性」があるのである。

「沼地のなかの Sutpen」というタブローでは、liberal としての Sutpen が描かれており、この事実から推察すると、彼の「人種」観は、「白人」「黒人」の間に本質的な差異はなく、「アメリカ」では「黒人」も「白人」になれるのだ、というものになる「べき」である。*Absalom, Absalom!* で、こうした「環境決定論」の可能性に言及しているのは、唯一の「南部出身ではない」語り手 Shreve である：

I think that in time the Jim Bonds are going to conquer the western hemisphere. Of course it wont quite be in our time and *of course as they spread toward the poles they will bleach out again like the rabbits*

and the birds do, so they wont show up so sharp against the snow.

But it will still be Jim Bond; and so in a few thousand years, I who regard you will also have sprung from the loins of African kings. (311 emphasis added)

黒人もアフリカから離れるにしたがって、肌の色が薄くなり、最後には「雪の白さ」とあまり変わらなくなってしまい、彼らが西洋世界を支配するようになる、という可能性について Shreve は語っているが、まさにこれこそが liberalism の論理的帰結である。アフリカでは、「黒人」は「黒人」にすぎないが、アメリカでは、「黒人」も「白人」になれるのだ。

しかしながら、*Absalom, Absalom!*において、「人種は環境によって決定される」という命題は、あくまで「蓋然性」にとどまる。先に引用した部分でも、「それでも、Jim Bond は Jim Bond にすぎない」と Shreve が言っているように、登場人物のだけれども、「人種は遺伝によって予め決まっているのであって、環境によって変更できないのだ」と信じている。だからこそ、南部において、「異人種混淆 (miscegenation)」は許されざる罪なのであり、(人類普遍のタブーである)「近親相姦 (incest)」以上に許されざるタブーであるのだ。実際に、Sutpen は、息子 Henry の力を借りて、混血の廃嫡児 Bon を殺害し、「異人種混淆」を防ぐ。(Sutpen 自身が直接手を下さないのは、一度 Bon を廃嫡した以上、いかなる「認知」も Bon に与えてはならないわけで、自らが直接アクションを起こせば、それはどんなものであれ、Bon が求めている「認知」になってしまうことに注意しなければならない。そういうわけで、やはり、Henry のような、できるだけ Sutpen に近い存在でありながら、他人の顔もできる「媒介」が必要なのだ。) 少なくとも「人種」に関する限り、Sutpen の館へと続く「掟の門」は閉ざされているのであり、それを乗り越えようとした Bon が門番 Henry に射殺されるのは「自然 (natural)」な成り行きである。ここまでの議論をまとめておくと、Sutpen のよって立つ「人種」観は、南部 planter のそれと全く同じ、「遺伝決定論」なのである。

Sutpen が抱え込んだ、この矛盾こそが「悲劇」の源泉である。それでは、Sutpen は、いつごろからこのような矛盾を抱え込むことになったのであろうか。それは、もちろん、少年時代に Tidewater で経験した、あの「トラウマ」と言っていいたい出来事である。ある日、少年 Sutpen は、父の言伝を持って、白人貴族 Pettibone の屋敷を訪れるが、応対した黒人執事は、用件を尋ねるまでもなく、少年に屋敷の裏口に回るように言いつける：

And now he stood there before that white door with the monkey nigger barring it [...] and he never even remembered what the nigger said, how it was the nigger told him, even before he had had time to say what he came for, never to come to that front door again but to go around to the back. (192)

これは、Sutpen の innocence を示す、有名なイニシエーションの場面だが、この後、彼は森の中のほら穴へと逃げ込み、「これから何をなすべきか」について沈黙考する。ここで面白いのは、Sutpen が起こった出来事を既知の情報を駆使して解釈することではなく、出来事に触発されて「何をなすべきか」という未来に想いを巡らせていることである：

But I can shoot him. (Not the monkey nigger. It was not the nigger anymore than it had been the nigger that his father had helped to whip that night. [...]): *But I can shoot him:* and the other: *No. That wouldn't do no good:* and the first: *What shall we do then?* and the other: *I dont know:* and the first: *But I can shoot him. I could slip right up there through them bushes and lay there until he come out to lay in the hammock and shoot him:* and the other: *No. That wouldn't do no good:* and the first: *Then what shall we do?* and the other: *I dont know.* (194-95)

ここでの Sutpen は、問題の本質を見定めている。問題は、poor white が黒人奴隷に侮辱された、という出来事の「表層」にあるのではなく、もっと奥深いところにあるということ、Sutpen は確実に理解している。要するに、ここにあるのは、「白人」「黒人」という「人種」問題なのではなく、planter, poor white という「階級」問題なのだ、ということに Sutpen は気づいているのである。だからこそ、彼の復讐のターゲットは、黒人執事ではなく、ハンモックに寝そべる Pettibone なのである。帰宅後も、Sutpen は考え続けるが、眠りながらついに自分なりの解答に辿り着く：

'If you were fixing to combat them that had the fine rifles, the first thing you would do would be to get yourself the nearest thing to a fine rifle you could borrow or steal or make, wouldn't it?' and he said Yes.
'But this aint a question of rifles. So to combat them you have got to have what they have that made them do what he did. You got to

have land and niggers and a fine house to combat them with. You see?
and he said Yes again. (197)

Sutpen の結論は、「planter と戦うためには、planter が所有しているものを自分も所有しなければならない」というものであり、彼は、「poor white から planter へ」という upward mobility を得ようと、己の「自由意志」だけを糧に、14才にして、単身、世間の荒波へと飛び出す。こうして、「沼地のなかの Sutpen」というタブローの原型ができあがったのであり、Sutpen は、liberal として、世界に飛び出す。

だからといって、Sutpen が、「人種」に関して「無知 (innocent)」だったというわけではないことには注意が必要である。Sutpen は、liberal としての「目覚め」を経験するよりも早くに、人種差別を刷り込まれていたのである。時計を少し巻き戻してみよう。Tidewater に越して来て以来、Sutpen の父は、この地の領主 Pettibone から仕事を請け負って生計を立てているが、父が酔っ払って帰宅した折に、「黒人奴隷を殴ってやった」と口走るのを Sutpen は耳にする：“We whipped one of Pettibone’s niggers tonight” (191)。「その黒人に何かされたから殴ったのか」と尋ねる Sutpen に対して、父は次のように答える：“Hell fire, that goddamn son of a bitch Pettibone’s nigger” (191)。

この一連のやり取りには、アメリカの「人種」関係の特異性が見てとれる。Sutpen の父のような poor white は、planter による「搾取」の恨みを、当の planter 自身にぶつけるのではなく、自分たちと同じく、社会の底辺に位置する黒人にぶつけるのである。つまり、「階級」の差異からくる不満を、「人種」的な敵愾心にすり替えてしまうのである。poor white からすれば、強大な権力を持っている上位者を攻撃するのは難しいので、はるかに安易なターゲットである下位者に暴力を振るうのである。(ある意味で、会社の上司に逆らえないので、そこでの不満を家庭に持ち帰り、自分よりも立場の弱い扶養家族に当たり散らす一家の大黒柱と同じ構図である。)このように、アメリカでは、人種差別にも「階級」の問題がからんでおり、これの最も顕著な形が poor white の「人種」意識なのである。人種差別の原因は重層決定されていて、どれか1つのものに帰着させることはできないが、poor white のそれに関する限り、ここで確認した「すり替え」が最も大きな要因であると言っていいだろう。実際に、Sutpen 一家はもともと Virginia の山岳地帯で「原始共産主義」的な生活を送っており、その時点では、「人種」的な敵愾心はまだ持ち合わせていなかったが、山を下り Tidewater にやってきて、plantation 経済に組み込まれるやいなや、父は黒人に暴力を振るうようになったのである。そして、このときに、Sutpen

自身も「人種」的敵愾心を吸収してしまったのである。

Sutpen が彼の父と異なるのは、Sutpen がこうした「人種」的敵愾心を「一瞬だけ」超越できた点にある。ただし、この「一瞬」のために、彼は大きな矛盾を抱え込んだまま人生の第一歩を踏み出してしまい、結果的には、真っ二つに身体を引き裂かれるようにして死んでしまうのであるが。その「一瞬」とは、先に見た「沈思黙考」の場面であるが、ここにおいて、Sutpen は「人種」的敵愾心を一時停止させ、より大きな「真実」を見ることができたのである。より安易なターゲットである、目の前の「黒人」に怒りを感じるのではなく、彼らの裏にあって自分たちを思いのままに操っている、普段は「見えない (invisible)」真の敵を垣間見ることに Sutpen は成功したのである。このようにして、Sutpen は upward mobility の可能性に気づき、それを実践していくのだが、悲劇的なことに、こうした liberalism が、「階級」の差異だけではなく、「人種」のそれをも解消するロジックであることにまでは思いが至らなかったのだ。Sutpen は、liberal として、「階級」の差異を超越しようとしつつ、paternalist として、「人種」の差異を保存しようとする目論みなのであるが、彼の「階級」意識においては特効薬として働いた liberalism が、彼の「人種」意識においては毒となったのである。そうであるにもかかわらず、従来の「人種」意識を捨てることなく、このスタンスを保ち続けようとした Sutpen は、liberalism の毒素にやられて、身体が真っ二つに裂けてしまうのである。

事がここに至って、我々は、Sutpen の人生の軌跡が、「アメリカ」成立のそれに似ていることに気づくだろう。13州が、連邦国家としてまとまる際に、それぞれの利害を完璧に調整することなく、「見切り発車」してしまった状況が、Sutpen の「ダブル・スタンダード」と重なってくるのだ。「建国の父」の1人である Hamilton の言葉を見ておこう：

I answer in the next place, that I should esteem it the extreme of imprudence to prolong the precarious state of our national affairs, and to expose the Union to the jeopardy of successive experiments, in the chimerical pursuit of a perfect plan. I never expect to see a perfect work from imperfect man. The result of the deliberations of all collective bodies must necessarily be a compound, as well of the errors and prejudices, as of the good sense and wisdom, of the individuals of whom they are composed. The compacts which are to embrace thirteen distinct States in a common bond of amity and union, must as necessarily be

a compromise of as many dissimilar interests and inclinations. How can perfection spring from such materials? (481)

もちろん、Hamilton が言うように、13もの主体が、完全な一致に達することなど不可能ではあるのだが、「根本的な差異」を有する州に関しては、連邦から除外するといった対処法をとらず、最初の瞬間に「妥協」をしてしまったことで、後の「悲劇」を生むことになったのかもしれないのである。

この文脈での「根本的な差異」とは、「自由州」「奴隷州」のそのことである。明らかに正反対のベクトルを持つ、これら2つの主体が連邦に共存したことは「妥協」の産物である、としか言いようがないのだが、19世紀に入り、「ミズーリの妥協 (Missouri Compromise)」「1850年の妥協 (Compromise of 1850)」もむなしく、1854年の「カンザス・ネブラスカ法 (Kansas-Nebraska Act)」で、「妥協」は決裂してしまう。そして、ついに南北戦争でもって国家が2つに別れて、骨肉相食む闘争状態に陥るのだが、この根本原因は「始まりの妥協」にあったのである。「アメリカ」も、Sutpen もともに、「決定の瞬間の狂気」に、後々までずっと悩まされたのである。

V. おわりに

ここまで、「沼地のなかの Sutpen」「ブドウ棚の下の Sutpen」という、お互いに矛盾する Sutpen 像を分析してきたが、そうすることで私が引き出したい結論は、*Absalom, Absalom!*において、Faulkner が、modernism の手法に沈潜するあまりに、「意図せずして」、postmodernism の領域に足を踏み入れてしまった、ということである。すなわち、1936年の時点で、Faulkner 文学、ひいてはアメリカ文学全体の paradigm shift が起きてしまったのである。「歴史ロマンス (historical romance)」*Absalom, Absalom!*において、Faulkner (あるいは4人の語り手) は、過去の先行作品との対話を通じて、「神話的過去」を取り戻すことを試みている。Faulkner のここでの手法は、いわゆる「間テキスト性 (intertextuality)」と言っているが、注意すべきなのは、Faulkner の intertextuality が、通常この概念と結び付けて考えられる postmodernism とは全く別物である、ということだ。postmodern な adaptation の泰斗 Linda Hutcheonによると、intertextuality とは、「先行テキストをパロディー化する」ことである。このことを踏まえた上で、彼女

は以下のように述べている :

The same parodic mix of authority and transgression, use and abuse characterizes intra-American intertextuality. For instance, Pynchon's *V.* and Morrison's *Song of Solomon*, in different ways, parody both the structures and theme of the recoverability of history in William Faulkner's *Absalom, Absalom!* (14)

postmodernist が、「歴史」を「取り戻し (retrieve)」不可能なものとして、冷めた態度で、それをパロディーし続けるだけであるのに対し、あくまでも modernist たる Faulkner は、先行テキストを脱構築することなく、何とか「歴史」を取り戻そうと、やっきとなっている。すなわち、Faulkner は、「シニフィアン」を「シニフィエ」に一致させようと、「言葉」を「ものそれ自体」に変換しようと奮闘を続けるのであるが、これこそが modernist の心性なのである。¹⁰

しかしながら、Faulkner が最終的に取り戻した「歴史」も、「複数性」を帯びていたことは重要である。結末において、modernist の Faulkner は、postmodernist に近づく。この事実を鑑みるに、*Absalom, Absalom!* は、一面で、「歴史 (history)」そのものを描いているのではなく、「歴史を取り戻そうとする試み (historiography)」を描いていると言っているのではないだろうか。

Notes

¹ ある意味で、これが、語り手の1人 Mr Compson の解釈枠である。そこでは、Sutpen の misogyny が問題になっており、Miss Rosa の怒りは、これに対する「復讐心」から来たもの、ということになる。

² ここで、*Moby-Dick* をひも解くことの重要性は、当時の「船」の慣行について教えてくれることにもある。捕鯨船にしる商船にしる、船の所有権は、釘一本に至るまで、株主の間で分割されており、航海からあがる利益の大部分は、大株主たちのものである、という事実である。Sutpen は、plantation を建設した後、豪華な家財道具一式を持ち帰ってくるまでに、6か月ほど Jefferson を留守にする。この点に注目して、John Matthews は、Sutpen が違法なアフリカからの奴隷密輸に関係していた、という可能性について触れている：“But Sutpen might have had time to arrange a high-risk, high-yield speculative expedition and perhaps even to sail on such a voyage to Africa himself” (251)。

本文の記述から判断すると、Sutpen が Jefferson 市民を共犯に仕立てあげようとした「大罪」は、Matthews の言う「奴隷の違法売買」であった可能性は高いと私も思うのだが、同時に、こうした売買から大きな利益を得るためには、密輸船の大株主か船長になるしかなく、前者だと最初から大きな財産を有しており、わざわざ危険を冒さなくても家財道具を調達できたはずだし（しがない商店主にすぎない Coldfield の信用では、そこまでの大金を借りることはできなかつただろうし、しかも、6ヶ月間姿を消す理由がない）、後者だと、常に海に出て、奴隷密輸のネットワークに組み込まれている必要がある、Jefferson に plantation を建設する2年こそが不必要なブランクになってしまうので、この可能性を確信することはできていない。奴隷密輸船は、捕鯨船と事情が異なるのかもしれないが、悪巧みをする人間はいつの時代にもかなりの数がいるので、やはり、大株主による権利の分割は行われていたと思われる。

- ³ Ted Atkinson は、*Absalom, Absalom!*が書かれた時代に注目して、Sutpen と、映画 *Citizen Kane* (1941)の Charles Foster Kane との間にアナロジーを見出している。ここで興味深いのは、「Sutpen のオーラ」を記述する彼の用語法である：“And Sutpen exercises this capability immediately, with his arrival causing a ripple effect in the community, which is immediately *mesmerized* by his magical appeal” (163 emphasis added)。
- ⁴ mesmerism を最も簡潔に描写した文学作品として、Nathaniel Hawthorne の *The House of the Seven Gables* (1851)を挙げておきたい。ただし、ここでは、か弱き女性を食い物にする、という mesmerism の負の側面だけが強調されている。これに対して、mesmerism のポジティブな面を描いている文学作品としては、Pauline Hopkins の *Of One Blood* (1902-03)を挙げることができるだろう。
- ⁵ Ahab が mesmerist である可能性に触れつつ、David Miller は、この時代の風潮を以下のようにまとめている：

[...] the psychological control of the *Pequod's* crew by that consummate “mesmerist” Ahab are only the most striking examples of the manipulation of unconscious energies that accompanies the dissolution of constituted hierarchical structures and the growing ineffectuality of reasoned discourse. The reorientation from mesmerism to hypnotism stemming from the discovery in 1843 of “suggestibility” as the basis for mesmeric phenomena little affected the explanatory power of mesmeric influence that continued on in the popular imagination in the concept of animal magnetism, with all its sexual overtones. (196)

-
- ⁶ Stephanie Smallwood は、以下のような事例を報告している。アフリカにあった奴隷貿易の基地で、2人の監督が10人の鎖につながれた奴隷を使役していたところ、奴隷たちは隙を見つけて監督を殴り倒し、8人が逃亡してしまったとのことである (42)。
- ⁷ Peter Lurie は、Miss Rosa と「催眠術師 (the mesmeric)」の関係を下のように記述している：“As a demonic figure cast in light, one who reveals the overwrought terms of Rosa’s imagination, Sutpen stands as the most forceful and potent influence on Rosa’s sensibility—as well as another example of her section’s cinematic method” (118)。Atkinson と同じく、Lurie も Sutpen と映画のアナロジーを指摘しているように、「銀幕」から発せられる光も、この時代の「オーラ」の1つであったのだろうか。
- ⁸ このように、連作短編の全てが「変身」に関するものであり、この短編のように、人間の「肉体」をギャグにしたものも多く含まれる。その意味で、Chesnutt は、“A Predicament” (1838), “The Man That Was Used Up” (1839) を書いた Edgar Allan Poe の後継者だということもできそうである。
- ⁹ Sutpen における、liberalism, paternalism の共存を、paternalism の脱構築の観点から論じた初期の実践として、Carolyn Porter の *Seeing and Being* を挙げておく。彼女自身も、最初に Sutpen と Flem は全くの別人物だと断言しているのだが、論が進むにつれて、この差異が曖昧になっている印象を受けるのは私だけなのだろうか。以下は Sutpen を記述したものであるが、Flem により一層当てはまるように思われる：“He regards everyone as a self-sufficient monad like himself, as the bearer of atomized social freedom. In realizing his freedom, egoistic man necessarily denies his relation to other men, since his liberty as a free man is founded on his separation from them” (236)。
- ¹⁰ Faulkner の *The Sound and the Fury* (1929), *Absalom, Absalom!* を分析しながら、Walter Benn Michaels は、modernism の定義の1つとして、「充溢した言葉」への志向性を挙げている：“[. . .] it [the sign] might function, in effect, onomatopoeically, without reliance upon a system of syntactic and semantic conventions [. . .]” (2)。

Works Cited

Atkinson, Ted. *Faulkner and the Great Depression: Aesthetics, Ideology, and Cultural Politics*. Athens: U of Georgia P, 2006. Print.

-
- Chesnutt, Charles. *The Conjure Woman*. 1899. *Charles Chesnutt: Stories, Novels, and Essays*. Ed. Werner Sollors. New York: Lib. of America, 2002. 1-100. Print.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!* 1936. *William Faulkner: Novels, 1936-1940*. Eds. Joseph Blotner and Noel Polk. New York: Lib. of America, 1990. 1-316. Print.
- . *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Vintage, 1950. Print.
- Hamilton, Alexander. *Writings*. Ed. Joanne B. Freeman. New York: Lib. of America, 2001. Print.
- Hutcheon, Linda. "Historiographic Metafiction: Parody and the Intertextuality of History." *Intertextuality and Contemporary American Fiction*. Eds. Patrick O'Donnell and Robert Conn Davis. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1989. 3-34. Print.
- Lurie, Peter. *Vision's Immanence: Faulkner, Film, and the Popular Imagination*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2004. Print.
- Matthews, John T. "Recalling the West Indies: From Yoknapatawpha to Haiti and Back." *ALH*. 16.2 (2004): 238-62. Print.
- Melville, Herman. *Moby-Dick; or, The Whale*. 1851. *Melville: Moby-Dick, Billy Budd, and Other Writings*. Eds. G. Thomas Tanselle, Harrison Hayford and John Hollander. New York: Lib. of America, 2000. 1-638. Print.
- Michaels, Walter Benn. *Our America: Nativism, Modernism, and Pluralism*. Durham: Duke UP, 1995. Print.
- Miller, David C. *Dark Eden: The Swamp in Nineteenth-Century American Culture*. Cambridge (UK): Cambridge UP, 1989. Print.
- Poe, Edgar Allan. *The Selected Writings of Edgar Allan Poe*. Ed. G. R. Thompson. New York: Norton, 2004. Print.
- Porter, Carolyn. *Seeing and Being: The Plight of the Participant Observer in Emerson, James, Adams, and Faulkner*. Middletown (Conn.) : Wesleyan UP, 1981. Print.
- Smallwood, Stephanie. *Saltwater Slavery: A Middle Passage from Africa to American Diaspora*. Cambridge (Mass.) : Harvard UP, 2007. Print.